

# ネンド / オンド

体温から生まれるデザイン

▶ vol.

8

text & illustration  
nendo / Oki Sato



連載 第8回:

人生のすべてをデザインに捧げた人間、  
フィリップ・スタルクという生き方。

こんにちは。デザイナーの佐藤オオキです。  
モノ作りに携わる人たちとの雑談を自由に綴っていく本連載。  
今回のお相手はデザイン界のスター、フィリップ・スタルクさんです。

デザインを生業とする者であれば誰もが一度は憧れる、  
その独特のスタイルや唯一無二のポジション。

軽快でユーモア溢れるスタルク節に乗せながら、  
彼がデザインとどう向き合ってきたかを話してくれました。

Photos MOHAMED KHALIL Coordination EKO SATO  
Cooperation LEEYONG SOO

〜 エンド 😊 .

## Philippe Starck フィリップ・スタルク

40年以上デザイン界の第一線  
を走り続けるクリエイター、  
デザイナー、建築家。数々の  
アイコン的なオブジェやホテル  
を手がけ、最近ではサステイ  
ナブルなデザインに積極的に  
取り組む。妻のジャスミンと世  
界と飛びまわり、パリ、ブラー  
ノ、南西フランスに暮らす。

「これはネンドのページだから、ネンドがディレクションすべきだな。俺は完全に黙っているから」と言いつつ、次々とアイデアが浮かび、謎のポーズを指定したスタルク。これは「真面目な表情がいいんだ。真面目な感じで、エル・デコっほいだろ」とのこと。



**nendo**  
**Oki Sato**

ネンド 佐藤オオキ

1977年、カナダ・トロント生まれ。2002年、デザインオフィスnendoを設立。'12年、エル・デコ インターナショナル デザイン アワードでデザイナー・オブ・ザ・イヤーを獲得。小さなプロダクトからインテリア空間まで、幅広いデザインを手がける。

“直観は毎日、自動的に届くものさ、  
フェデックスみたいだね(笑)”  
—フィリップ・スタルク



右 重ねた本の上に乗る、手をつなぐパターン。子供と大人のイメージ？ 左右入れ替わっても撮影。左 「何かこう、複雑に一体化されたいよな。だろ？」とスタルク。二人でぐねぐね絡まったポーズをとった。



本連載8回目にして満を持して登場するのが「キング・オブ・デザイン」

「神」として知られ、まさに圧倒的な存在であるフリップ・スタルクさんです。エッフェル塔を望む事務所に向うと、奥の部屋からガハハツという

スタルクさんの笑い声が。あの中に「神」がいるのかと思うと、自然と心拍数が上がりま

す。そして、扉が開きます。**スタルク** おー、来た来た。ホットチヨコレト飲む？ 俺は飲むけど。

**オオキ** (いきなりホットチヨコレト?) あ、いただきます。今日はよろしくお願いします。

**スタルク** あれ? レコーダーないけど大丈夫?

**オオキ** いつもないんです。なんとなく、適当な感じで書いているので(笑)。

**スタルク** え。絶対忘れるよ、そんなの。ウチの貸してあげる。

**オオキ** ……。ありがとうございます。

——対談相手からレコーダーをお借りしたのは初めてです。

**スタルク** 俺はね、デザインの動向には疎いんだけどさ。ネンドのことは知ってるよ。どこでも名前を聞くからな。

**オオキ** またまた冗談を(笑)。

**スタルク** ヨシッ。話をする前にさ。

一点だけハッキリさせようじゃないの。

**オオキ** え? と、言いますか?

**スタルク** 間違いない今、世界ナンバーワンはネンドでしょ。

**オオキ** いやいやいや、ひょっとしてみんなにそう言っているのでは(笑)。

**スタルク** ンなこたないよ。なんていうか、俺がブレイクしたときに似てるんだよな。40年前に「パリに変なヤツがいる」って世界中がザワザワしたんだ

けどさ、それを感じるね。正直、ネンドの作品は詳しくないんだけどさ。あ、本当に業界のことをよく知らないだけだから、気を悪くしないでくれ。な?

**オオキ** ともでもないです。

**スタルク** でもさ。ちょっとムカついてることがあってね。バカラのチェス

セットとアクサールのランブシャワー。

**オオキ** え? え? え?(汗)

**スタルク** あれ、俺が昔、同じアイデアを提案して、「技術的にできない」

って言われて諦めたのにさ。どこの馬の骨ともわからないネンドってヤツが

普通にやって。スッゲー頭にきたの。アクサールの社長とは絶縁よ。

**オオキ** ええっ? す、すみません。

**スタルク** いいの、いいの。別にあなたが悪いわけじゃない(笑)。絶縁状態も3カ月で完全和解したしね(笑)。俺、

**オオキ** は、はあ。

**スタルク** でも、俺と同じアイデアとは、筋がいいな(笑)。

**オオキ** ありがとうございます。スタルクさんほどのクライアントとも良好

な関係を築いていますよね、家族のような親密さというか……。

**スタルク** 確かにいい関係だな。社長と頻りに食事をしたり、休日を一緒に過しているわけではないけどね。肉

体関係があるわけでもないし。

**オオキ** (笑)。出たっ! スタルク節!

**スタルク** ひたすら仕事をしてきただけ。40年以上ね。今もノンストップで

働いているよ。仕事をしまくっているからさ、空き時間ができると何をしたらいいのかわからなくなる。

**スタルク妻** この間、夕方頃、子供に「パパどこ?」って聞いたら、「パパは寝て

いる」って即座に答えるの。「こんな時間になんか聞いて聞きたら、「あ、間違えた。パパは仕事」って。

**オオキ** 寝てるか仕事してるかだから、どちらか答えておけばいいと(笑)。

**スタルク** そのとおり。

**オオキ** 他人事とは思えません(笑)。**スタルク** この仕事はさ。どれだけ自分と対峙できるかに尽きるんだよ。

**オオキ** そうですね。**スタルク** ゲーテの「ファウスト」って話を知っている? 悪魔に自分の魂を

売っちゃう話なんだけどさ。それと一緒に、クリエーションの世界に足を踏み込み、ひたすら努力を続けると、ある瞬間気づくんだよ。

**オオキ** 何にですか?**スタルク** 自分の魂を、人生そのものを、売ってしまったことにさ。デザイン

というものは、自分の魂を、命を、ひたすら捧げ続ける職業なんだよ。生命を捧

げ続けることで、生命を獲得しているんだな、きつと。だから、つまねー作品

を見ると、批判以前に「ああ、コイツは素敵なカフェでお茶でも楽しんでるんだろうな」と思っちゃう。

**オオキ** そこですか(笑)。**スタルク** 俺も通りすぎる人を横目で

見ながら楽しめたらいいけどさ。(何事もなかったかのように)物事には対価があるんだよ。何かを得たければ、相応の対価を払わないといけないのは当然

だろ? 残念ながら世の中にタダなんて存在しないからな。

——彼のこれまでの功績を考えると、

どれだけの犠牲を払ってきたのか寒気がします。

**スタルク** デザインっていうのはさ、しごとく検証して、失敗して、改善して、

つて延々と繰り返す、まるで檻に閉じ込められたような状態じゃない? 片

足が檻の中で、もう片足はテラスに乗っているようでは無理なんだよ。

**オオキ** 最近ではワーク・ライフ・バランスを大切にしようとするデザイナーは多いと思いますが。

**スタルク** うーん、どうだろうねえ。そういう連中のデザインの質を見た感じだと、ほとんどが両足をテラスに置

いているようにしか思えないけど(笑)。**オオキ** ところで、普段どのようにしてアイデアを考えているんですか?

**スタルク** アイデアは考えるものではないんだな、これが。

**オオキ** どういうことですか?**スタルク** アイデアはロジックじゃないんだよ。物事を順序立てて考える

ロジックは人に説明できるけど、アイデアはそういうものじゃない。俺の場合はナメ方向に、直線で射止める

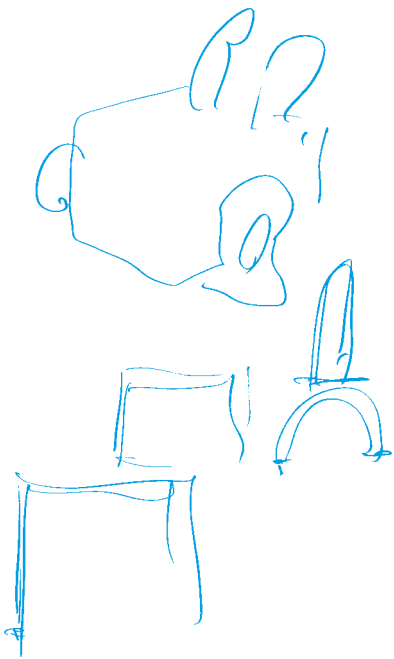
わけよ、答えを。瞬時にね。瞬間移動みたいな感じかな(笑)。

**オオキ** 瞬間移動……。**スタルク** A→B→C→Dじゃなくて、

AからいきなりDなの。**オオキ** だから説明できない、と。

**スタルク** そういう物の見方しかできないんだよね。直感や毎日自動的に届くものさ、フェデックスみたいに(笑)。

**オオキ** はあ(苦笑)。

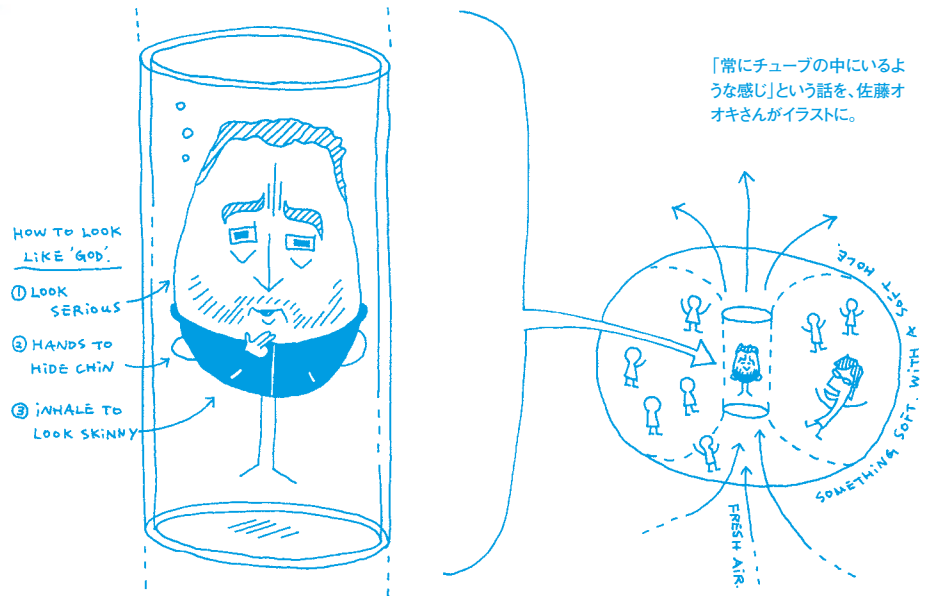


フィリップ・スタルクの最近の仕事より。上はTOGでスタルクがデザインしたロッキング・アームチェア「Light Rock」。今年のミラノ・サローネで発表された。下は2014年に完成予定のモンペリエにできる施設「Le Nuage」。



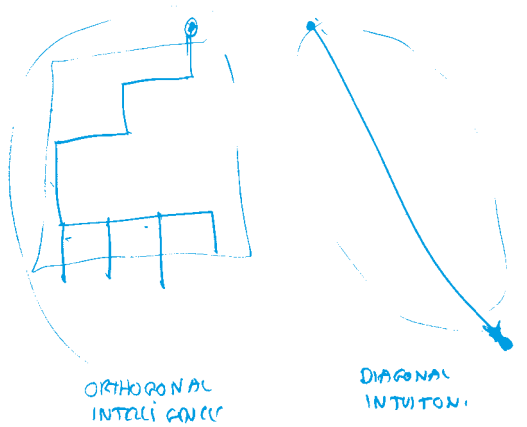
## “デザインにおける紀元前と紀元後、狭間に立つあなたは「神」ですよね”

— 佐藤オオキ

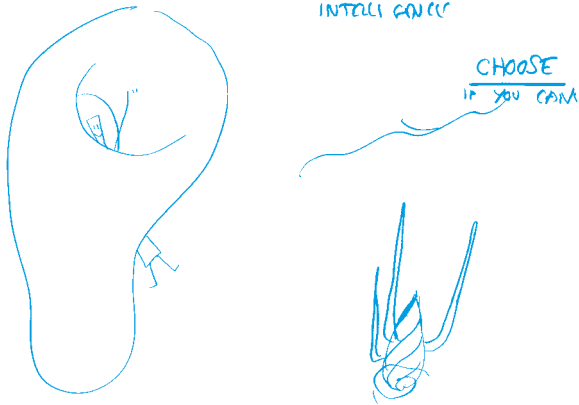


DON'T WORRY MR. STARCK.  
YOU'RE NOT IN THE TUBE...

... WE ARE!



雑談中にスタルクがサラサラと描いたスケッチ。「最初はおもったねじれた形をして」と説明した。アレッシィの「ジュージュー・サラリフ」や、「柔らかい何かに柔らかい穴があいてるね、何かはわからない」というイラストなど。



**スタルク** この間、あるメーカーからコーヒーテーブルのデザインを頼まれたんだけど、俺コーヒーテーブルが嫌いだね。でもね、8個くらい40分足らずでサクッと作ったね。

**オオキ** え？

**スタルク** 脳は特定の働きをし続ける、脳自体がその機能にフォーマット化されるんだよ。だから俺の脳も「直感力」のみに特化されちゃってるわけ。

**オオキ** 年とともに衰えたりは？

**スタルク** いや、むしろ速度は上がった。で、脳が特化されてほかのことが何もできなくなるわけ。俺なんかガソリンスタンドで車に給油すらできない。

**オオキ** 特異な思考能力は日常生活の役に立たない、と。

**スタルク** そう。仕事をしていないと

きは完全なアホね。日常的なことすべてが自分の範疇じゃなくなるのよ。

**オオキ** じゃあ、趣味もないんですか？

**スタルク** ないね。なんにも興味がない。興味がないから欲望もない。

**オオキ** 不意に不安になりませんか？

**スタルク** あるいはまわりの人は？

**スタルク** 正直、まわりは困っていると思う。でも、自分に悪意はないし……、とにかく、俺は「ここにはいない」んだ。

**オオキ** ここにはいない？

**スタルク** 俺たちは素晴らしい人生を送っている。でも、俺はその人生を生きてはいないんだよ。

**オオキ** どういうことですか？

**スタルク** 肉体はたしかにここにあるし。精神もここにある。だけど、決してこの場所で生きてはいない。常に「違

う場所」にいて、そこで思考して生きてるんだよ。俺の人生はずっとそうだったからね。「違う場所」は現実社会からは絶縁された場所なんだ。

**オオキ** そこから還ってきたいとは思わないのですか？

**スタルク** 不可能だろうな。うーん、どう言えばいいかな。半透明のチューブに入れられているような感じ、というか。

**オオキ** チューブ？

**スタルク** そう。たまに誰かがチューブの外側に現れても、なんとなく存在がわかる程度で、自分の声は相手には聞こえないんだ。

**オオキ** 常にそのチューブの中に？

**スタルク** うん。多分死ぬまでこのチューブがなくなることはないだろうな。まあ、自伝を書くとしたらタイトルは「チューブ」で決まりだな(笑)。

**オオキ** じゃあ、喜びを感じることもないんですか？

**スタルク** ない。喜びは「この場所」つまり実社会の価値観だから。でも、奥さんとの生活は幸せだし、心地よく暮らしているよ。家もあるし、車もバイクも飛行機も船も持っている。キレイな奥さんと子供たちがいて、優秀なスタッフにも囲まれている。

**オオキ** (壁に飾られている牛の首の剥製を指差して)素敵な牛も。

**スタルク** そう。牛も(笑)。でもさ、そんなものは喜びとは関係のないことなのよ。例えるなら、すべてをテレビのなかの出来事みたいに眺めている感じかな。プハハって笑いながらね。

**デザイン界の「神」は、何を考えているのか？**

**オオキ** 喜びじゃないとしたら、仕事を通じて得られる満足感や達成感はないのか？

**スタルク** それは一時的にはあるよ。カンフル剤みたいなものかな。プロジ

エクトが終わったときにだけ、一瞬、その檻から出られるから。すぐに次の檻があるんだけどね。でも、終わったと確信することは稀。常に疑念が残る。

**オオキ** 完全に満足することはないってことですか？

**スタルク** ない。絶対にね。

**オオキ** そこまで人生をデザインに捧げながら、「デザインが嫌い」と言うのはなぜなのでしょうが。

**スタルク** デザイン自体に価値なんてないのよ。俺はデザインそのものではなく、それがどのような影響を人類に及ぼすのか、ということに興味があるのね。アラン・スーションの曲で「俺はマリーを愛しているわけじゃない。彼女に潜んでいる謎を愛している」って歌詞があったんだけど、そんな感じかな。哲学的、政治的、社会的コンセプトに興味があったね。とにかく社会は恐ろしいほど問題が山積みだから。デザインは微力だけど、なんらかの形で人類の進化に寄与しなくちゃダメじゃない？ そう思わない？

**オオキ** キレイなデザインを作って満足している輩が多すぎるんだよ。

**オオキ** 確かにそうかもしれない。

**スタルク** デザインって簡単なんだよね。2分もあれば椅子くらいデザインできちゃう。普通にいいものができるし。

**オオキ** はい(苦笑)。

**スタルク** キレイな椅子を作って喜んでいるようではダメなんだよ。次元が低すぎる。志が低すぎる。だつてさ、想像してみ？ 死んだときに閻魔さんと呼ばれてさ、

**閻魔** お前さあ、結局一生かけて何を成し遂げたわけ？

**スタルク** 椅子をデザインしました。

**閻魔** プツ、マジウケるんだけど。

**スタルク** ……、ええと、あ、あと、ランプとかトイレ用ブラシとか。

「神」になるってどんな気分ですか？

**スタルク** そんなものは存在しないよ。

**オオキ** 道ゆく人に知ってるデザイナーの名前を尋ねれば、恐らく全員「スタルク」って答えると思うんですよ。

**スタルク** たぶん俺より前にはデザイナーという職業がなかったからな。当時、ミラノに10人ほどデザイナーがいた程度で。駆け出しの頃に「デザイナーです」って言っても、「だっってお前フランス人じゃん」って言われるだけで。

**オオキ** そう考えると、デザイナーにおける紀元前と紀元後、狭間に立つあな

たは「神」となりますよな。

**スタルク** まあ、そういう解釈をすればな。ただ、世界一の美女がいたとして、鏡がないとしたらどうなる？

**オオキ** 自分が美女だとわからない。

**スタルク** そう。俺には鏡がないんだよ。別に鏡を探しているわけでも、鏡から逃げていくわけでもない。すべては窓の外の雨や風みたいなものさ。

**オオキ** 他人からの評価は「チューブの外」の価値観だから、ということですね。

**スタルク** まさにそう。

——ミラノ・サローネで人だかりを見つければ、「あ、スタルクがいるんだろな」と思うほどの求心力。チャールミングな性格と切れ味鋭い発想力。そして、40年以上、トップの座を譲らない底知れぬエネルギー。彼が言うところの「チューブ」「違う場所」は窮屈そうに見える、その実は外部の騒音から守られ、自身と対話し、直観を磨ける場ではないかと思うのです。誰よりも生命を捧げながら、誰よりも生命を獲得し続ける彼が、自分には誰よりも幸福なクリエイターに見えたのでした。